

終わりと

始まり



池澤 夏樹

まずは個人的な話。
自分が老いたと思う。それが日々
実感される。

身体能力が少しずつ失われる。
基礎代謝が減るとはどういうこと
か。食物として入ってくるエネルギー
ーを活動に変える機能が低減する。
身体の方がもうそんなに働くと言
っているかのように。無理に食べても
無駄に肥えるだけ。

我が血流は消化か歩行か思考の一
つにしか行かない。二つのタスクが
同時に実行できない。

足元がおぼつかない。駅の階段を
下りる時は一歩ずつ決意して踏み出
す、歩道のわずかな起伏に躓きかね
ない。長く坐っていた後で立つとふ
らつく。万事ゆっくり。万事慎重。
つまり愚図。

視力が落ちる。以前は乗り物の中
ではいつも何か読んでいたのに、最
近はたいがいぼんやりしている。
いつか車の運転を止める日がくる
だろう。

キーボード入力が遅い。ぼくの右
手の人差し指はヘバーデン結節で少
し左に曲がった上にねじれている。
スマホを打っていて、指先のどの部
分が画面に触れるかわからないので
ミスが多い。何度もやりなおす。

小さな字が読めない。振り仮名の
濁点と半濁点の区別にルーパーが要
る。イタリアの「ベニス」なんて間
違えたら大変だ。

しゃれたレストランの暗い店内で
メニューを貰って、さて、気取った
長い料理名が読めない。老眼鏡に装
着する小さなLEDを作って売った
らどうか。名付けて「メニュー・ラ
イト」。

老いては若きに席を譲ろう

身に染みる衰え

小さな字が書けない。

遠方の身内に毎月送金している。
相手も老いているので口座振込では
おぼつかない。現金書留という古典
的な方法に依るわけだが、この封筒
の「お届け先」の欄が小さい。住所
の部分は二行だけ。実質六九mm×二
四mmでは長いマンション名が書きき
れない。封筒そのものは大きいのだ
から周囲には空き地がいくらでもあ
る。なんとかしろ、とぶつぶつ言う
のが我ながら老人めいている。

(冗談として言うけれど、先日行
った京都のさる店は「京都府京都市
東山区高台寺北門前通下河原東入ル
鷲尾町〇〇〇」という住所であっ
た。さて、この二十八字を「お届け
先」欄にどう書く? こういう住居
表示を今も使っている京都人をほく
は尊敬するものであるのだが。)

身体能力が足りないからエネルギ
ーを節約する。つまりすべてにおい
て横着になる。すぐにしなくても済
みそうなのはさぼる。身辺が散ら
かっていわゆる汚部屋に近づく。

不義理が増える。メールの返信が
遅れる。みなさんごめんなさい、と
言いながらも手が動かない。

カレンダーが頭に入っていないか
ら、スケジュールの話が空でできな
い。

スマホは使っているがアプリの類
は最小限に抑えている。新しいもの
を入れてその用法を身につけるのが
面倒くさい。

藤永茂さんに『おいぼれ犬と新し
い芸』という名著があった。海外に

出た科学者のエッセーだが、三十五
年前のこの本の表題が今になって身
に染みる。新しい芸は身につかない
のだ。
知的好奇心が衰えた。
新しいものに飛びつかななくなっ
た。

旅に出る時、昔ならば事前にずい
ぶん予習をしたのだが、最近を着い
てからインターネットに頼る。もの
の見かたが浅くなっているのか。

ぼく個人のことはどうでもいい。
愚痴ないし繰り言と聞き流していた
だいて結構。

しかし社会の高齢化というのはつ
まりぼくのような老人がどんどん増
えるということである。申し遅れた
がぼくは今は七十四歳と二か月。来
年は後期高齢者。その後は晩期高
齢者で、やがて末期高齢者。

新しいシステムは若い人が作る。
それを次々に覚えて使って遅れない
ようにする。四十代の友人が、今は
まだいいけれど六十代になったらた
ぶん追いつけないと言っている。

フェイスブックやインスタグラム
などは、飾り窓のまぶしい商品を見
ている思い。いつか苛立つて、筒井
康隆の小説に出てくる不逞老人のよ
うにテロに走るかもしれない。

冗談半分を書いてきたが、高齢化
でこの国は活力を失うだろう。あら
ゆる面で生産力が落ちる。あとは衰
退の一途、とか。

社会の平均年齢が年々上がる。若
い世代を準備しなかったのだから当
然である。我々は商業資本とテクノ
ロジーが提供する目の前の悦楽にう
かうかと身を任せ、出産・育児・教
育という投資を怠ってきた。国の無
策は今さら言うまでもない。

と書きながら、悲憤慷慨でもな
い。いずれ退場する身とは承知して
いる。では若い人に席を譲ろう。
年下の諸君、幸運を祈る。

五
語
ろ

人生の贈りもの

セルフカバー 亡き彼